

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2008年6月11日  
森林塾青水  
事務局便り  
茅風通信 25号



4月27日。野焼き

金子拓紀

08年3月~5月の活動報告(事務局).....1  
「有識者会議」一行・藤原ご案内記(事務局).....2

特集：野焼きのあとさき

第1回講座「コモンズ村ふじわら-野焼きと山の口開け」

- ・上ノ原の懐かしい思い出 - 野焼きに初めて参加して - (林實治).....2
- ・初めて上ノ原の野焼きに参加して (金子拓紀).....2
- ・郷愁の野焼き (草野洋).....3
- ・「もえあがれ」 家族4人で参加した野焼き - (北山郁人・路加).....4
- ・雨男、念願かなった野焼き (浅野勉).....4
- ・上ノ原に春が来た (高野史郎).....5
- ・春の黒 (関岡千賀).....6
- ・「入会の森」の草原開き・野焼きを体験して(日大生一同).....6

第2回講座「コモンズ村・ふじわら-侵入木除伐と生き物調べ」

- ・野焼きから2週間~焼野原から緑の芽 (内野みつ子).....8
- ・大地の鼓動 - 2週間後の草原で - (湯本恵子).....8
- ・5月11日、生き物調べの記録です (海老沢秀雄).....8
- ・除伐とチップの試運転 (真庭修).....9
- ・7月~9月のイベント、プログラムのお知らせ.....9
- 特別企画 『写真で見る野焼きのあとさき』.....10
- 会員・会友だより
- ・同行二人(3)菩提編(川端英雄).....11
- 編集後記~塾長のつぶやき~.....12

2008年3月~5月の活動報告

(事務局)

3月5日 3月度幹事会。07年度決算報告ならびに08年度活動計画(案)決定。

3月25日~26日 木村・清水が藤原区 みなかみ町 沼田市と巡回訪問、以下の人々に面談し、諏訪神社の屋根替え、野焼き、年間活動計画などにつき打合せ、協力をお願い。(藤原区:氏子総代の林實治さん、林正之さん、吉野なお次さんならびに熊木区長。雲越萬枝さん、林親男さん、林好一さん。明川の大坪祥一さん、大坪義一さん。大沢の中島仁三郎さん。みなかみ町:木村観光商工課長、岸農政課長補佐、みなかみ町観光まちづくり協会角田氏。沼田市:利根沼田県民局・武井行政事務所長、利根沼田森林管理署・飯干署長、永井酒造・永井専務)

4月2日 4月度幹事会。07年度決算(案)ならびに08年度予算(案)の決定。

4月12日「会員総会」開催。(結果は4月15日付書簡をもってご報告済み)

4月19日~20日 「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議」のご一行24名を木村、町田、清水で藤原集落をご案内。内容は2頁ご参照

4月26日~27日 第1回講座「コモンズ村・ふじわら-野焼き・山の口開けと侵入樹木の除伐-」。初日は小雨降るなか、侵入木の除伐。2日目、萬枝さんのご判断どおり好天に恵まれて野焼き実施の運びに。2日間の延べ参加者約は140人。詳細レポートは特集ご参照。萬枝さんはじめ地元の皆さまがた、利根沼田森林管理署の飯干署長、菊池次長、そして、林課長はじめ町役場の皆さまがた、お世話

になりましたありがとうございました。民宿「本家」の雲越良昭さんご夫妻、今年もまた交流会で夜遅くまでお騒がせいたしました。最後に10人のヤングパワー日大生の皆さん、よく来てくれましたね、ありがとうございます! また、来年もね!(^^)!

5月7日 5月度幹事会。ホームページ抜本改訂作業の進捗状況報告、「草原セミナー」開催要領(案)の検討、「茅風」通信25号の編集方針打合せ、など。

5月10日~11日 第2回講座「コモンズむら・ふじわら-生き物調べ(1)と侵入木の除伐-」。野焼きから2週間経ったフィールドの生き物調べと除伐したウツギをチップで粉砕・チップ化する実験も。2日間延べ参加者、27人。

5月14日 地球環境基金の助成金対象団体むけ説明会&ヒアリング。浅川、清水で対応。

5月17日 麗澤中学「樹木観察会」。柏キャンパスにて中学1年生130名に日大3・4年生(教職課程)ならびに当塾の連合スタッフにて対応。池田リーダーはじめ日大生の皆さん、ボランティア参加いただいた会員・会友の皆さん、そしてお執りまとめ役の湯本さん、お疲れさまでした。

5月25日 まちなつと船橋主催「海から眺める三番瀬」に当塾より三好、大前、高野、川端、浅川、清水が参加。あいにくの雨でお目当ての「太平丸」の出航はならなかったが、英傑船長・大野さんのお話しをとっぴり聴きながら上下流交流の楽しい一日に。以上(清水)

6月6日森林塾青水ホームページリニューアルオープン

## 「有識者会議」一行・藤原ご案内記 (事務局)

正確な会の名称は『文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議』。

同会議が主催した視察ツアー『内山節と歩く、六合村そして、みなかみ』(19～21日の2泊3日)に清水が同行、藤原地区では木村氏(水上町観光商工課主幹)ならびに阿部和廣・藤原区長、林實治・諏訪神社氏子代表総代、林正之・同氏子総代も合流し共にご案内をした

一行は24名。共同代表の内山節(哲学者)、同伊東延男(国立文化財機構)、古橋源六郎(森と村の会・会長)等いわゆる有識者のみならず速水亨(速水林業・社長)、鳥羽瀬公二(堂宮大工)、山田利行(伝建の構造設計)など、いずれも実業の世界で第一級の錚々たる顔ぶれであった

藤原で案内した場所

上ノ原のフィールド、雲越家住宅、諏訪神社、明川集落と郷土館、宿泊は「夢工房」(夕食後、獅子舞保存に熱心なご亭主夫妻と懇談)

諏訪神社で最後のご挨拶に立った林・氏子総代のお話しの要約

『皆さまにお越しいただき、励ましの言葉をいただき嬉しい。・・・区としても、2年後に屋根替えをすることを目標に実行委員会を組成して、具体化をはかっていきたい。・・・氏子会としても、茅刈りだけでなく野焼きから参加していきたい』

思いもかけぬ嬉しいことがありました

解散前に、古橋先生に名刺交換ご挨拶を申し上げたところ、「エールをおくりたい。気持ちばかりだが」とおっしゃって寄付金をいただいてしまいました !!



清水英毅

### 特集:野焼きのあとさき

#### 第1回講座「コモンズ村ふじわら -

#### 野焼きと山の口開け」

### 上ノ原の懐かしい思い出 - 野焼きに初めて参加して -

林實治(諏訪神社氏子総代)

過日は大変御世話になりました。26日は期待しておりましたが雨となり残念でした。

27日は何とか天候に恵まれ、上ノ原の野焼きが出来

ました事を大変喜んでおります。

皆さまの大勢の方の協力がなければ出来る事では有りません。私共は上ノ原と聞いただけで懐かしい思い出で一杯です。

小学1年から、今の立教大学寮脇よりスタートし久保ゴールの上ノ原藤原区民大滑降スキー大会。小学生以上の防火線作業。4年生以上、木炭1俵横山ダムの下より大倉峡(立岩)迄、一日作業として背負って歩いた事が良き思い出に残っています。

また、学校に行く前に上ノ原でわらびを取り、時間迄に学校まで運び、皆のグローブやバットなど運動具を買い野球をやった事も思い出です。

今度の野焼きに私も初めて参加させて頂き、森林塾青水の方々が遠くからおいで戴き奉仕作業で藤原の村起こしに協力して戴き、藤原の歴史、名所、生物迄調べて戴き何より感謝致して居ります。私共も今後、藤原の村おこしの為に出来る限り協力をさせて頂き戴きませぬ。



笹岡達男

### 初めて上ノ原の野焼きに参加して

金子拓紀(みなかみ町観光商工課)

今回初めて、上ノ原「入会の森」野焼きに参加しました。前日はあいにくの雨で、首都圏からお越しの方々も残念そうな顔をしていたのが印象的でしたが、山の口開けや雑木刈りは雨の中行われ、今回日本大学学生さんも参加し和気あいあいと雨にも負けず作業をされていました。

山の口開けというセレモニーは、山の神様に前年の恵みを感謝し、今年一年の恵みと安全を願って祈ると説明を受けました。現在は、そのように感謝をする気持ちがだんだんと薄れているような気もしますが、昔の人達は自然と共存するのに山の神様や水の神様、様々な神様に感謝の気持ちをもって生活していたのだと改めて実感させられました。

翌4月27日は、朝から晴れ間が広がり野焼きも開催されることになり、青水の皆さんもホッとされたのではないのでしょうか!?

地元住民の雲越さんより、野焼きをする際の注意事項や消化方法を教えていただき、いよいよ待ちに待った火入れをすると、刈り取られたススキがチリチリと燃え、前日の雨の影響もあってか、ゆっくりと燃え広がる場所もあれば、ひとたび風が吹くとパチパチと

音を立てて燃え広がる早さに驚くこともありました  
私も野焼きというものの自体はもちろん知ってはいましたが、なぜやるのか？どのような効果があるのか？までは知るはずもなく、今回野焼きを体験し、野焼きの大切さを学ぶことができ大変良かったです  
現在私たちは、環境や自然の大切さを考える時代を生きており、昔は自然と共存していた先人達の知恵や方法を参考に、環境問題を考えていくことも必要なのではと思いました。  
仕事ではありましたが、とても貴重な体験をさせていただくことができました。

### 郷愁の野焼き

新米会員 草野 洋

#### 【再会の水上・藤原】

12年ぶりに訪れた水上、満開の桜が出迎えてくれました。懐かしい人々とも再会しました。広川さん、仁三郎さんに出会ったときは思わず手を握り締めてしまったほど……。広川さんは相変わらず「何とかしないと……」と情熱的に語り、仁三郎さんはこの春で退職したようで以前に比べておとなしくなったかな？月岡さんは首にコルセット姿だったが相変わらずエネルギー。飯干さんは地元で評判がよいようでエールを送りたくになりました。まさしくふるさとに帰ったようでした。

藤原は当時何度も訪れて隅々まで知っているつもりだったのに今回の野焼きで新たな魅力が見えてきました。春の風景に佇む民家と庭の花々、咲き始めた絶妙な自然配置のオオヤマザクラ、野良仕事を待つ田畑、道祖神、残雪の山々など忘れかけていた幼いころの風景がよみがえってきました。40年の役所勤めを終えたばかりの私にとって心洗われる1泊2日の旅でした。「野焼き」をしながら故郷の「茅山」のことを思い出しました。



#### 【故郷の茅山】

私の故郷（熊本県芦北町）は、有明海に注ぐ中程度の川の上流部の典型的な山村集落で20軒ほどの家屋があり山とのつながりが深いところでした。今回の山焼きは私の5歳ごろから10歳ごろに当たる昭和30年代前半の記憶をよみがえらせてくれました。

以下は故郷の茅山の記憶（想像を含む）です。

\*\*\*\*\*

茅山は集落の共有で利用していたことは間違い無いが国有林に位置しているのではないと思われる。

どのような所有形態だったのか次の帰省の際に確かめてみたい（今は造林地になっている）。茅は、屋根の葺き替え、炭俵、馬草に利用されていた。

屋根の葺き替えを何度か見たことがある。総替えでなく部分的な補修だったであろう。たぶん、ローションが組まれていたのではないだろうか集落中が総出で行っており、下のものが屋根上の者に茅束を渡すときの「ヨシ」「ホイ」「ヨッ」という掛け声が耳に残っている。

炭俵作りは茅の利用が最も多かったのではないだろうか。

わが集落は、10軒ほどが国有林を払い下げて炭焼きを行っており、木炭を入れる炭俵は茅の自家製だった。屋根葺用は細くて腰が強い茅が良いとのことだが炭俵用は太い茅が良いと思われるので使い分けていたのだろうか。15kgの木炭を詰めた丸型と角型があって「櫻小丸」「雑小丸」とか言っていたが炭俵の買い上げ価格は1俵10円ぐらいだったろうか。

炭俵は冬の間や雨の日の女性たちの仕事であった。土間や納屋で2、3人が一緒に噂話に花を咲かせ大きな笑い声を立てて賑やかに編んでいたのを一人遊びしながら見ていたハナタレ坊主が見えようだ。

炭俵は、座ってちょうどいい高さの木製のウマ(?)で茅の一本一本を小指より細い程度の小縄の先に真ん中がくびれた木製の数本の錘を交差させて編んでいく。私も祖母に教わっていたはずなのにやったことがあるので藤原に道具があればぜひやってみようと思っている。

茅には悲しい思い出もある。

秋に刈り取った茅を運び出す仕事は重労働である。茅束は大人の背丈ぐらいで胴回りは大人一人半の手を回したぐらいの大きさにして先の方が尖った状態にかずらで縛り背負子(しょいこ)で背負って何キロも下のふもとまで運ばなければならない。私の母は体が丈夫なほうではなかったが家族の働き手としてこの重労働をやっていた。

ある秋の昼時、私はお腹を空かして茅を背負って昼には帰ってくる母や祖母を山道がよく見えるところで待っていた。やがて木橋のところまで来た母が突然座り込んだ。近寄って見たものは母が吐いた血であった。その後のことは思い出せないが大きな円錐柱の茅の塊が母の背中を押すように傾いて立っていたことが目に残っている。母はその後働いていたので快復したのだろうが「茅出し」は母にとって血を吐くほどの辛い仕事だったのだろう。

野焼き(山焼き)はたぶんやっていたのだろうが危険な仕事だから大人だけでやっていたのだろう。記憶がない。ただ、山の伐採後の地ごしらえを火入れでやって3、4年は焼畑(コバ作)で大豆やそばなどを作っており、それに連れて行ってもらったことがある。子供たちは野良仕事の手伝いの合間にホオジロの巣の卵を見つけたりノイチゴを摘んで遊んだりしていた。

\*\*\*\*\*

## 【上の原の野焼き】

今回の野焼きへの参加は退職後の心境もあってかすっかり郷愁に浸ってしまいました。メンバーの方々と楽しい夜の懇親会などの交流もたくさんありました。

野焼きは火付け係をやらせてもらいました。燃え上がる炎に「俺の人生はまだまだこれからだ、燃え続けるぞ」との思いがわいてきました。

講習会での野焼きはただ山村の生業と思っていたことが新たな位置づけとして「生物多様性の保全」、その方法は「科学的」との解説はそのとおりと納得しました。学習会(2)の資料の中に林業技術(下刈効果、パイオニア樹種、発芽、ぼう芽など)や山村の生活術(山菜の増殖など)も見えてきました。機会があればまとめてみたいと思います。

これからの活動が楽しみになりました。どうかよろしくをお願いします。

### 「もえあがれ」- 家族4人で参加した野焼き -

北山郁人・路加

#### ママの感想

乳幼児2人と一緒に初参加させていただきました。作業等のお手伝いは何一つ出来なかったのですが、学生の方、参加されているみなさんがとてもやさしく、わんぱく小僧の相手をしてくださったのでとても感謝しています。初日はあいにくのお天気でしたが、子供とともに雪が大好きなので残雪目指して、ついお散歩に夢中になってしまいました。(作業されていたみなさん、ごめんなさい)2日目、無事に火入れが出来てよかったです。「表面しか乾いていないから、あまり燃えていないよ。もっと勢いよく燃えるんだよ」と教えていただきましたが、それでも、燃え広がり煙が立ちこめるあの光景は素晴らしい。頭上の雲の流れまでもが速くなったように感じました。あの大地から、緑の新芽が芽吹きだす、その瞬間も見てみたくなりました。まだなんのためにしているのか、全く理解していない息子も、周りの景色がようやく見え始めた4ヶ月の娘にも、きっと将来、貴重な体験をしたんだといえる日が来ることでしょう。

ちなみに息子はお父さんの背中で「もえあがれ～、もえあがれ～、もえあがれ～ガンダムう」と歌っていたそうです。



清水英毅

## パパの感想

野焼きに家族4人で参加させていただきました。初日は、雨で気温も低く、夜半まで雨が続き、今回の野焼きは絶望的かと思いきや夜遅くまでやけ酒?で盛り上がったおかげか、翌日は天気も回復し、気温もどんどん上がり暑いぐらいの陽気になりました。そして、11時からいよいよ火が入れられると、燃えにくいところもありましたが、いき良よく燃え上がりました。テレビで良くなる野焼きの風景ですが、実際の自分で火をつけることに参加でき、大変感動いたしました。カヤがパチパチと音を立てて燃える様子や煙の匂い、たじろぐほどの熱量などその現場でないと体験できない経験をすることが出来ました。私の背中に背負られていた2歳の息子も興奮しておりました。それにしても、前日にあれだけ雨が降っていたにもかかわらず、意外と簡単に火がつき、改めて火の恐ろしさを実感いたしました。タバコや焚火の不始末でも、簡単に山火事が起きてしまうことを身をもって感じる事が出来ました。そして、なんともいえない恍惚感のような物を感じながら、帰路に着きました。

ところが、自宅に到着寸前に、近くの集落で本物の火災が発生。消防団に所属しているので、荷物をおろすまでもなく現場へ急行!民家二件全焼でした。幸いけが人はいませんでしたが、火と煙に巻かれた一日となりました。

### 雨男、念願かなった野焼き

浅野勉

小生にとって今年の「みなかみ藤原」行きは3度目ということであった。小生は、出席率があまりよくない上に、雨男の汚名を着せられている塾生であるために、当日が近くなるとついつい天気が気になっていた。案の定、雨模様の天候となってしまった。過去を振り返ってみても、



笹岡達男

1度目は2006年秋のススキ刈りである「茅刈り」であった。霧雨の中での作業となった。決して立派な茅のボッチを沢山作ることができたという訳にはいかなかったが、十分に楽しむことができた。しかし翌日はそのシーズンにとって早めの降雪があり、雪に足をとられながらの1日となり、満足のいく活動ということにはならなかった。

2度目は2007年6月の「芦ノ田峠」古道の再生であった。その昔には、「物資・食料等の運搬や人の往来には欠かせなかった」道路の復活を!と意気込んで参

加したものの、これまた雨にたたられてしまい、雨中での厳しい古道再生作業であった。

今回の3回目の参加は、従来から是非チャレンジしてみたかった「茅場の野焼き」であった。本来なら、初日に野焼きを終えて、すっきりした気分で翌日は自然の生き物調べや茅場への進出樹木の除伐作業のはずが、今年も、初日は雨に見舞われてしまった。またしても雨男のせいかと半ば諦めていたものの、翌日は薄日のさす「野焼き日和」となってくれた。前日雨にたたられて「野焼き」を楽しめずに、帰ってしまった人々には申し訳ないが、遂に念願の野焼きを体験することができた。



金子拓紀

しかしようやく実行できた野焼きも、湿り気が多かった草原のせいで燃え方はあまり良くなかったように感じた。もっと勢い良く燃え盛る光景を想像していた小生にとっては、欲を言うなら少々物足らなさを感じた。また、初体験でありながら火付け隊には編入されず、重要な防火隊に指名されたことが誇らしい？と同時に若干残念なところではあった。次回は新たな火付けチャレンジを体験したい。

「二酸化炭素の排出規制だの地球温暖化だのと、地球規模での環境問題がクローズアップされてきている昨今において、森林は保護されなければならない」という主張と、「森林塾青水が行なっている、茅場へ進出してくる白樺を含む木々を除伐しなければならない」という現実を、どのように折り合いをつけていくのかという疑問点を、小生は今回の野焼きに参加してみて解消することができた。それは「この藤原の茅場面積も既に相当減少してきているし、日本文化の貴重な伝統の一つである萱葺屋根を維持するのに必要な茅を確保するには、茅場を侵食してくる樹木を除伐することは許されてもよいのではないか。」という幹部の方からの説明であった。

日本の文化・日本人の心を守るためには、我々には車・電気・ガス等を利用するような日々の豊かな暮らしを、少しでも犠牲にし、制限をする生活態度が望まれるのであろう。茅場の維持活動を体験しながらの感想であった。

最後に、昨年の朝霞西高校のワンダーフォーゲル部や今年の日本大学生物資源科学部の諸君のような、これからの社会を担っていく若者の参加を得ることができ、一緒に行動できたことには、大いなる刺激を受け（老いも同時に感じ）将来への期待感を抱かせてもらえることとなった。

## 上ノ原に春が来た

高野史郎

人気コンビらしい漫才屋さんのせりふを借りれば“よかったよかったよかった”となるんだろうか。前夜、かなり激しく雨が降るのを気にして、何回か目が覚めた。今年はまだダメかもしれない。それが、総監督の万枝さんの予言どおりに晴れた。

枯れて倒れたススキの、葉の部分は乾いている。昨年秋遅くに刈ったそのあとから、冬の期間に、これだけの成長があったということか。生命力の恐ろしさを感じる。カメラマンの方には、ちょっと残念な、遠慮がちな炎と煙だったけれど。よかった。

若い日大の学生さんが大勢来てくれて、みんなも若返った。

見渡す上の原のすすき草原で、緑色だったのはフユノハナワラビだけ。標高1000mの草原の、春が遅いのを実感した。今回は何種類かの植物を、スケッチ用にいただいて帰宅した。

山では、やっと芽吹きはじめたばかりのシラカバが、帰りの上毛高原駅の裏口では雄花が垂れ下がっての花盛りだった。

枝の根元で、小さく上を向いているのが未熟な雌花。標高の温度差と、自家受粉を避ける雌雄の開花の時間差と、両方が見られて興味深い。

「本家」に泊まったおかげで、すぐ近くの雲越家住宅の裏の墓地へ行けたのもラッキー。予想したように、オオウバユリが茶褐色の新芽を地表にのぞかせていた。去年咲いた株に、茶色の花茎も倒れて残っていた。この植物は不思議のかたまり。単子葉なのに、ヒマワリみたいな葉っぱ。チューリップや他のユリ類と違って、開花までに何年かがかかり、花を咲かせるとその株は枯れてしまうらしいのだ。



作画：高野史郎

「遊山館」横のオオヤマザクラは、まだツボミだったのに、野焼きが無事に終わった27日午後には、諏訪神社あたりの株が満開だった。すっごく素敵な濃いピンク。どきどきする。持ち帰ったサクラのツボミも、帰宅した翌日には花開いた。

オオウバユリの新芽は紫がかっている。ずぶとい葉脈が何やらひどく動物的なたくましさ！ 絵を描き終わって鉢に植え込んだ。1週間たったら、なんだか都会のサラリーマンのような、普通の葉っぱの表情に戻ってしまった。がっくり。

山の墓地のオオウバユリは、いま、どんな顔つきなのだろう。この7月、麗澤中の子どもたちが行く奥利根水源の森では……？刈り取られないで、花を咲かせて欲しいもの！

## 春の黒

関岡千賀



「黒」を春の色だと感じたのは、初めてかも知れませんが。野焼きを終えて、火がおさまった後、白い煙をほんのりと立ち上らせる茅原の温かな「黒さ」は、

まぎれもなく春のはじまりを告げる色でした。

山野の中にいると、色彩への感覚が研ぎ澄まされるようで、上毛高原駅から車で藤原へ上る途上、内野さんが車窓越しに見える木々を次々に指さして「あのカラマツの芽の色、明日また変わっているわよ。一日一日、景色が変わる時期なのよ」と教えてくださったのをきっかけに、色の变化に伴って晩春から早春へと時間を逆行する楽しさを覚えました。

温泉街やダム周辺は満開の桜と鮮やかな黄水仙、茅原に近づく頃には、ぼんやりとした墨色の木々の幹、合い間に明るい芽吹きの色。色にまつわる日本語表現の豊かさをないがしろにしてきた自分を、反省しながら今これを書いています。

子供のころ、突然、耕運機で無残に掘り起こされた近所のレンゲ畑を眺めて、あのピンクの花畑をどうしてつぶしたのだと、恨めしく思った記憶が甦りました。あれも、春の仕事なのですね。

## 「入会の森」の草原開き・野焼きを体験して

日大生一同

私たち日本大学生物資源科学部の教職課程を受講している学生は、今回森林塾青水の方々から野焼き体験のお誘いをいただきました。そこで、その内の学生10名が群馬県水上で初めての野焼きを体験しました。今回の野焼きの体験からさまざまなことを感じ、改めて自然に対して考える機会をいただきました。貴重な体験に参加させていただき、ありがとうございました。

今回参加した野焼きは、私にとって初めての経験でした。

初日は、あいにくの天気、野焼きができませんでした。しかし、デモンストレーションで野焼きの方法、野焼きを行う理由を聞きました。ヒトが山の環境に手を加えるのはどうかと考えていたが、話を聞いたら納得でき、とても勉強になりました。

二日目は晴天で無事に野焼きを行うことができました。今後理科教員を目指す上で貴重な体験ができました。  
(生物環境工学科 千葉正人)



今回、野焼きというものを初めて経験させていただき、勉強になることが多くありました。

実際に野焼きを行うには、土の状態、除伐

作業、消化の準備など必要であることを知らなかったため、事前準備がとても大切だと学びました。一歩間違えば山火事になってしまう恐れがあることを青水さんや地元の方のお話で実感いたしました。また、なぜ野焼きをするのかなどのお話を聞いたことも大変勉強になりました。

なかなか参加する機会がないことなので、今回お話をもちかけてくださった青水さんの方々、お話をしてくださった地元の方やボランティアで集まった方にとっても感謝しています。この場をおかりして、御礼申し上げます。是非とも、またこのような機会があれば参加したいです。ありがとうございます。

(生物環境工学科 樋口理沙)



今回の野焼き体験は、毎日家と大学の往復ばかりしている私にとってとても新鮮な体験でした。環境保全を聞くとしても植林など森林を増やすイ

メージがあったのですが、逆に森林を増やさないことが生物多様性の維持に繋がる場合もあることを知って驚きました。また、一つ新たな視点から物事を考えられるようになったと思います。二日間という短い期間でしたが、ここで学んだことは大きな財産になると思います。参加してみて本当によかったです！

(農芸化学科 森 加奈子)

私は今回初めての焼きに参加させていただきました。参加させていただく中で、野焼きを行う意味や奥利根の土地を草原のまま保つ重要性などたくさんのお話を聞かせていただきました。

今まで、単純に火をつければ草はすべて燃えるだろうと思っていたのですが、実際に行ってみるとただ火をつければいいというわけではなく、さまざまな条件がそろっていないと火がつかないのだと実感しました。このような貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

(森林資源科学科 渡部美由記)



今回野焼きに参加するまで、野焼きという行為に対して、あまりいい思いを抱いていませんでした。植物に火を放つという行為に抵抗があ

ったためです。しかし、実際は野焼きをすることによって保護される生物、文化があることを知り、非常に重要だと思いました。

また、泊めていただいた宿の周りを朝 30 分ほど散歩したのですが、ツクシや蔦のとうなどが沢山有り、『里山』の魅力を感じました。

是非また機会があれば、水上に行きたいと思います。

(海洋生物資源科学科 磯野 康介)

「野焼きをするようになってから草原に生える茅が良質なものになった。その茅が神社のかやぶき屋根に使われる。」数々の貴重な話を聞いたが、特に印象に残ったものがこの話である。まさに、野焼きという伝統によって文化が守られたのである。今回、野焼きに参加したことで自然だけでなく日本の伝統とそれを知る人々にも触れられた。これは今までに無い貴重な経験であった。これからも日本の古き良き伝統と文化、そして自然を守るためにも、野焼きを続けて欲しいと思う。

(海洋生物資源科学科 小野 真光)



私が今回の野焼きに参加させていただいて学んだことの中でも特に印象的だったのは、必ずしも土地の森林化が良いことではない、という

ことです。「森林は守ったほうがいい」と無条件のうちに思っていた私にとって、とても意外な見方だったからです。自然は大切だが、人間も生きていかなければいけないということが、とても難しいバランスでつながっているということに改めて気づきました。私は、人間の都合と自然の関係の中のひとつとして今回の野焼きを見て、人から自然に与える影響を最小限にして生活に必要な恩恵を得よう、という意識を強く感じました。今回の野焼き体験では、そのほかにもたくさんの方のことを学ぶことができました。ありがとうございました。(海洋生物資源科学科 柴原 桂)

野焼きは、初めての経験でした。ススキ原を保つことの大変さや重要さを少しでも学ぶことができ良かったです。樹木以外の生物にもいろいろと教えてい

ただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。参加させていただき、ありがとうございました。

(応用資源科学科 鎌原 一恵)



今回、野焼きという貴重な体験をさせていただきました。また、野焼きの意義についても学ぶことができました。茅生産のためだけではなく、草原にすることによって草原性の動植物を保護することもできるのだと初めて知りました。

さらに、麗澤中学校の生徒が7月に学ぶ、水源の森について私自身が見て触れることによって、事前に行われる樹木観察会に対する考えも深めることができました。貴重な体験、本当にありがとうございました。

(動物資源科学科 伊岐 昌子)



今回、初めての野焼きを体験してさまざまことを学びました。一番印象に残っていることは、「野焼きをすることで森林化を防ぐ」という内容のお話でした。

近年、私たちの周りで自然保護について関心が高まっている中、「森林を守ろう」という内容をよく耳にします。しかし、今回はその逆のことを試みているのです。最初、私はこの矛盾点に理解ができませんでした。話を聞くと、野焼きの目的が「野焼きをすることで草原に生息する動植物を保護する」であることを知りました。「人間が森を開拓して草原を、そこに生息する動植物を保護するために人間が手を加える」、という流れを知り、正直複雑な思いを抱きました。

水上は自然に恵まれ、その土地に足を運んで肌で自然を感じることができて良い経験ができました。また、野焼きについてのお話を聞いたり野焼きの工程を知ることによって、改めて自然について考えさせられました。これらの経験は、理科の教員を目指す上でとても良い経験になったと思います。このような機会をいただき、ありがとうございました。

(動物資源科学科 池田 愛美)

## 第2回講座「モンス'村・ふじわら」 侵入木除伐と生き物調べ

### 野焼きから2週間～焼野原から緑の芽 内野みつ子



清水英毅

5月10日、朝  
天気予報では雨  
模様。藤原では  
どうなのかな？  
といつも思う。  
今回予報通り2  
日間とも良くな  
かったが、そん  
なに濡れる訳で

もなく作業は順調に進んだが寒かった。  
冬の寒さはわかっている、5月の若葉の陽気の中、  
朝4、地元の人はそのなかに驚いていなかった。  
霧の中からはいつも見慣れた風景がうかびあがって  
きた。水彩画の中にいるような風景、松屋デパートで  
見た松室さんの絵を思い出した。  
野焼きの後二週間しか経っていないのに焼野原から、  
緑の芽が土の中からのびている。カヤの新芽、華麗な  
すみれやひとりしずか、そしてもち草が伸びている。  
味わってあげなければという気持ちにかられ、やわか  
かそんなものを摘んでもち帰り天ぷらにて春を味わ  
った。

### 大地の鼓動 - 2週間後の草原で - 湯本恵子



清水英毅

5月10日。今期  
の野焼きから2  
週間、ススキ草  
原の様子はどう  
だろう。  
現地足に足を踏み  
入れてみる。  
おや、茶色。。。？  
枯れ草？いや、  
違う。

黒焦げの中に鮮やかな緑！！  
ススキの新芽の緑だ！！足早に近寄ってみる。  
凜としたその姿はなんとも誇らしげである。  
2週間前に野焼きで真っ黒になったススキ草原は、大  
地の鼓動を感じさせるかのように私たちを出迎えて  
くれた。  
ススキを測ってみると平均10センチ前後。  
数年前から野焼きに参加しているが、年々ススキの質  
が良くなっている。細く長く丈夫。  
着実に古き良き時代のススキによみがえろうとして  
いる。  
ここでちょっと一口メモ。  
ススキの「スス」は、葉がまっすぐにすくすく立つこ  
とを表わし、「キ」は芽が萌え出でる意味の「萌(キ)」  
だと言われているそう。納得。

巷ではアキバ系(秋葉原系)で『萌え～』というほめ  
言葉が流行で話題。  
となると、ススキも流行中?!なのでは。

### 5月11日、生き物調べの記録です 海老沢秀雄

5月11日の「生き物調べ」で記録できたものをコー  
ス別に書き出しました。力不足から「？」がついてい  
るものもあります。おいおい正確にしていきたいと思  
います。



海老沢秀夫

なお、今回とく  
に目立ったの  
は、どちらか  
というと湿っ  
た場所の花た  
ちでした。ニ  
リンソウやシ  
ロバナエンレ  
イソウなど  
です。しかも  
それらは

比較的大きな「群落」をつくっていました。  
上の原はススキ草原ですが、均一の環境からできて  
いるわけではありません。水辺、湿地、より乾燥した場  
所、林縁など、いくつもの環境がモザイク状に見られ  
ます。火入れや刈り払いなどの「手入れ」をするとき  
は、こうしたモザイク環境にも配慮していく必要があ  
りそうです。

管理道(看板～武尊山登山道出合い)

オオタチツボスミレ	花
オクノカンスゲ?	花
スゲs p	花
ニリンソウ	花
ヒトリシズカ	花
キブシ	花
ツボスミレ	花
ヒトヨタケ	きのこ
ミミズs p	種名は不明
草原内(スギが立ち並ぶ境界沿い、管理道～ミズナ ラ林の間)	
シラカバ	花
キクザキイチゲ	花
ツボスミレ	花
ヤマエンゴサク	花
木馬道	
オオバクロモジ	花
シロバナエンレイソウ	花
タムシバ	花
オオカメノキ	花
イタヤカエデ	花
スゲs p	花
ハハソの泉	
ニリンソウ	花
ヤマエンゴサク	花
オクノカンスゲ?	花

十郎太沢沿い	
ニリンソウ	花
スゲ s p	花
オクノカンスゲ?	花
モミジイチゴ	花
ツボスミレ	花
シロバナエンレイソウ	花
ヒトリシズカ	花
全域・周辺で	
ホオジロ	声
ウグイス	声 ( 笹鳴き )
ウソ	声

枝であれば直径 2 センチ位でもエンジンは軽快に回転し負荷もかかった様子もなく、力のあるエンジンだと印象を受けた。



武さんが「カッターに力がかかりすぎると、クラッチが作動して自動的に止まります」と説明があり、枝をだんだん太くしてみたところ直径 3 センチ位ま

## 除伐とチップターの試運転

真庭修



清水英毅

5月10日第1日目は午前11時30分頃上ノ原の到着、周囲は霧がたち込め小雨で肌寒かったが、あたりの空気は澄んでいて森林特有の芽吹

きの香りがすばらしく、その空気を胸いっぱい吸い込んだ。

みなさんの協力でたちまち炎が赤々と燃えて昼食となりました。女性の方が具だくさんの暖かい味噌汁を作って下さり、この味噌汁の味は新鮮野菜の特徴を良く生かし、特に幅の広い肉厚のニラが味噌汁に合っていてとてもおいしくて、お陰様で体の芯から暖まりました。

塾長さんが「除伐した小枝は道まで出して下さい、明日はチップターの試運転をします」と説明がありました。

2日目は雨もあがり、薄日が差し上ノ原のまわりをかこむ山々の新緑がはじまり、小鳥が嬉しそうにさえずり遠くにうぐいすの声も聞こえてきました。

チップターは午前10時頃、中島武さんお運転する軽トラックで運ばれてきました。3人いれば積み下ろしが出来る重量であり、碎断部分の中を覗くと回転刃が光って見えシンプルな作りで、アルミエンジンもピカピカに光っていて錆がみられず保管の状態が良いことがわかる。チップターはガソリンエンジンで、中島武さんの手際良い操作により一発で始動し心地よいエンジンの響きである。

いよいよ昨日除伐して道脇に出しておいたウツギ、ノバラ等の小枝の碎断である。最初は、太さ5ミリ位のウツギ、ノバラを両手でつかんでチップターに差し込むと、すぐに引き込まれて細かく切り刻まれて勢いよく飛び出した。よく見ると、5ミリ位のチップになっていて少し太い小枝を差し込んでみたところ、生の小

では運転を続けることができた。カッターの刃も新しいため良く切れるが、機械のためにもあまり無理をしないで使いたいと思った。

チップにする材料は豊富にあり茅場に生える樹木は今後永遠にあり、除伐されたソダ類をチップにして役立てる発想はすばらしい。一番身近に考えられるのが有機肥料にして利用、特に茅のチップはブランド有機肥料になると思う農家は土作りに茅を畑に入れるからです。

マンションのベランダにプランターを置き家庭菜園を楽しむ人が多いとテレビで報道されたりしますが、家庭の生ゴミとチップを混ぜれば早く堆肥となりこれを使えば有機栽培である。これからは世界的に食糧難の時代がくるでしょう。日本は食糧以外からバイオ燃料を造ろうとしています。茅もバイオ燃料に利用されるかもしれません。

茅の有効利用は未知の世界であります。

## 7月～9月のイベントプログラムのお知らせ

7月2日(水)

「全国草原再生ネットワーク」総会

7月度「幹事会」

7月4日(金)～5日(土)

自然遊学主催「初夏の水上交流会」

7月11日(金)

麗澤中「水源の森フィールドスタディ」

7月23日(水) 川越小「里山探検隊」

8月17日(日) 諏訪神社・例大祭

8月22日(金)～23日(土) 藤原区民祭り

8月24日(日) 藤原湖一周マラソン大会

9月3日(水) 9月度「幹事会」

9月13日(土)～14日(日)

第4回講座「コモンズ村・ふじわら 寺山峠の復活(1)と生き物調べ(4)」

9月20日(土)

当塾主催「草原セミナー」(午後、青山・環境パートナーシッププラザ)

## 特別企画 「写真で見る野焼きのあとさき」

会員・会友の皆さまから素晴らしい写真をたくさんお寄せいただきました。野焼きの数週間前の残雪のフィールド。火入れ直前の様子。燃え上がる紅炎と紫煙。やがて、鎮火後の未黒野の大地へ。そして2週間後、火入れをした大地には早くも新しい生命の息吹きが…。冬の雪原から早緑の春へ、人と自然が織なす大地のドラマをご賞覧ください。



林親男

除雪 4月2日～7日 周辺積雪 120cm



林親男

70cm



笹岡達男

山の口開け。萬枝さんのご挨拶



海老沢秀夫

講習会「良いスキとは…」



笹岡達男

外国から初参加？



金子拓紀

侵入木の徐伐作業



海老沢秀夫

火消し用の杉の枝



内野みつ子

配置につく火消し隊



金子拓紀

いよいよ着火



金子拓紀

広がる炎



内野みつ子

燃え盛る炎



金子拓紀

火消し作業と鎮火確認



海老沢秀夫

2週間後、早くも咲き出したカタクリ



清水英毅

手前は火入れしたエリア



2007年の野焼き。萬枝さんの力作

同行二人(3)菩提編

川端英雄

四国遍路道 1200 km を、42 日間かけて通し打ちしたのも、去年の話になりました。

3、菩提の道場(愛媛編)

弘法大師伝説

弘法大師にまつわるいくつもの伝説を見聞きした。「食わず芋・・・大師が芋を乞うたが、拒否したらそれ以降その土地の芋は石のように固く食べられなくなった」「弘法水・・・飢えた大師が水を所望し、貴重な水を提供したら、以後豊富な水が湧くようになった」など。概して大師に善意を示したものには幸せが、害意を示したものには不幸がもたらされる筋書きになっている。圧巻は「衛門三郎物語」でしょうか。食を求める大師を長者の衛門三郎は門前で追い払い、三度追われた大師が鉄鉢を投げると鉢は八つに砕け、以後8日のあいだに長者の8人の子どもが死ぬ。非を悔いた長者が大師を追って四国をめぐること20度、いまわの際に現われた大師に許しを乞うたという話。いまひとつは19番立江寺に伝わる「肉髪付の鉦の緒」伝説。不義密通を働いた女の黒髪が逆立ち、立江寺の鉦の緒にまきついて離れなくなった。大師に懺悔すると、頭の皮と髪が鉦の緒についたままはがれ、かろうじて命だけは許されたという、こわ〜い話。

我々が耳にしていた大師伝説は土地の人々に役立つ話が多い印象だったけれど、ちょっと意外。これら弘法大師伝説を「エイッ」と総括すると「俺に逆らうものは許さんぞ!」か。時の天皇の権威をフルに活用した、豪腕の面目躍如といったところか。

善根宿・職業遍路・居付き遍路・お接待

歩いていると椅子をならべただけの遍路さん休憩所から、さすがに風呂はないけれど寝具や湯茶の用意を備えたお遍路無料の小屋(宿)が、相当数ある。個人が、土地の有志が、街の中小企業のおやじ連中が金を出し合ってボランティアで建てたものだ。場合によって食事を給しているところもあるとか。善根宿といわれ、若い人たちを中心に活用されているようだ。1日3千円以内で歩く若者たちはずいぶん利用していた様子。四国には、いまだにこのようなお接待の精神が残っている。わたしもお金、弁当、果物、パン、飲み物、スイカ、ドリンク剤、菓子、代金の一部をおまけなど、たくさんのお接待を受けた。善根を積む、祖先の供養のため、身代わり巡拝を頼むなど、遍路の動機はいろいろあるだろうけれど、江戸時代のむかしはこのようなお接待のおかげでお遍路ができた庶民は多かったんだろうな。善根宿といいお接待といい、「利他」の精神がなければできないことではない。

このような善意に付け込む輩がいるという。お接待をあてに、または強要しながら年中遍路道を歩いている職業遍路、食事ができる善根宿に居着いてしまう居着き遍路。ただし、納経帳を買え!という寺が、納経の受付をしながらせんべいをバリバリ口に入っている坊

主が、納経所の窓に足を投げ出して休んでいる坊主もいるのだから、善意に付け込む輩はなにも彼らだけではない・・・。

草葉の陰に・・・

高知のJRごめん・なはり線の高架下のゴミの大群もすごかったが、愛媛県の内海から津島町にかけての山間は放置自動車が多い。総じて愛媛は自動車ゴミが多く、いたるところにといった感じ。また、遍路が歩くへんろ道だからゴミは無い!というのは甘かった。あるある。道にはたばこのすいがら・菓子袋。草葉の陰からも弁当がら、ペットボトル・飲料缶、ポリ袋、タイヤ、自転車などが垣間見える。もちろん、へんろばかりではないのだが、いまや国民をあげて「公德心」をゴミ捨てしている。ゴミの管理者も土地によって自治体、警察、ボランティア団体、職域団体、保健所などさまざま、これでは実効をあげるのはむずかしいんだろうな。

間伐はみどりを育てる深呼吸

台風5号接近中、背後の岩山が頭上に迫り、石でできている境内を雨水が勢いよく流れる45番岩屋寺では多少怖い思いもしたが、こんな台風接近の中でもバスの団体参拝客が一組来ていたのにはびっくり。

51番石手寺をすぎ松山市街地にはいると、松山木材市場の「間伐はみどりを育てる深呼吸」の大きな看板が眼にはいる。四国は木材の集散地。高知、愛媛のここに製材工場が見え、丸太を載せたトラックが行き来する珍しい風景も。伊予三島は製紙工場の城下町だったけれど、「郊外に大型ショッピングセンターができて商店街はシャッター通り。途中で見てって下さいよ」と喫茶店のおやじ。人気のないアーケードの下を車が走っていた。

熟田津に船乗りせむと月待てば・・・

道後温泉。坊ちゃんとマドンナに挟まれて記念写真を1枚撮ってもらう。観光客のあいだを抜けて歩くこと20~30分、山頭火がコロリ往生した・一草庵を覗く。通りからすこし奥まったところにある、小さな木造平屋建て。外壁も板葺き。「鉄鉢の中へも霰」ほかの歌碑がせまい庭にいくつか立っている。路中、しばし同行していた沖縄のフリーカメラマン、ぼくも山頭火の歌が好きなんですよと。彼は「お遍路」のガイドブックの写真取材をかねての遍路中。

著名な万葉歌のひとつ「熟田津に舟乗りせむと月待てば 潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」

(額田王)が謳われた地と比定されているみつを見たくて、炎天下を急ぐ。1時間余みつ の漁港を眼にする。外港も見えたかったが52番太山寺で納経を受けるためには5時までに入らねばならず、あきらめる。

菩提の道場(愛媛)は23寺・200 km。甲子園出場の今治西高の門前を通過した。

菩提~煩惱を断じ、真理を明らかに知って得られる境地(広辞苑)。<菩提編・完了>

4月26日、野焼き予定日の初日の午前11時半。夜来の雨と霧で視界不良の中、火入れ実施の可否を決める3者協議を開始。萬枝さんの「火が付く状態がないので今日は出来ません」で中止決定。口をへの字に結んだ厳しい表情の中に残念無念、哀愁の影がかすかに漂うのを見た。折角、早くから除雪して防火帯を築き、充分な乾燥期間もとれたのに。東京からの大勢のボランティアに加え、今年は地元の婦人会や諏訪神社の氏子衆も見えるというのに……。我々も「この状態では明日も無理、予備日の5月3日まで防火帯の雪がもたないし」と半ば諦めて夜の交流会を迎えた。一区切りついた所で、萬枝さんが待ちかねたように「ところで夕方の予報だと、明日は天気良くなりそう。火入れ出来るかもしれない、どうですか」とご発言。萬枝さんだけが真剣に最新の天気予報をチェックしてくれた。あの一言がなかったら、翌日の野焼きは出来なかっただろうし、パパの背中にいた桂月くんが「もえあがれガンダム」と唄うこともなかっただろう。

40年ぶりの再開から5年目を迎えた今年の野焼き。悪条件にも拘らず2日間で延べ140余人もの参加者を得た。毎年、気まぐれな山の天気と振り回されつつも奥里山の風物詩として定着しつつあるか見えるその陰に、この地に生まれて70余年の歳月を豪雪と付き合い、気まぐれな山の天気と折り合いをつけてきた一古老の研ぎ澄まされた判断と静かに燃える情熱を見る思いだった。語られざるドラマの積み重ねが風物詩を紡ぎだす。

5月11日、日本自然保護協会「モニタリングサイト1000」の一翼を担う生き物調べが始まった。我々の調査の眼目は草原に与える人為的インパクトを5年毎に把握すること。野焼きはもとより侵入木の除伐や茅刈り、そしてワラビ採りや犬の散歩もみんな人為的インパクト。野焼きから2週間後、レポートにあるように火を入れた場所と入れなかった場所とでは歴然たる差が見られた。

草原は希少生物種の宝庫であり、絶滅危惧種の単位面積当たり生息数は森林などと比べて最も高いらしい。我々の大先達で島根県三瓶山麓で野焼きを続けるボランティア・グループのリーダー高橋泰子さんが「少ない面積を守って、沢山の絶滅危惧種を守れる環境であることを知ってほしい」と仰っている。かつての上ノ原の茅場は約200%。今わずかに11ヘクタールを残して踏みとどまっている。出来る限り多くの人々の理解と協力を得てプラスのインパクトを与え続け、多くの生き物たちと人が入り会える美しいススキ草原の佇まいを取り戻したいものだ。

翌12日、侵入木の除伐。管理道沿いのウツギを徹底退治してずい分スッキリした。伐ったウツギは試運転をかねてチップで細かく粉碎した。道に落ちてたまったチップをつまみ上げた真庭修さんが「こ

れはイチゴ栽培用のマルチに使えますよ。ヤーコンの肥料にも良いですよ、ヤーコンは化学肥料を嫌いますから」と言ってくれた。その場でさっそく衆議一決、真庭さんのイチゴ園と自然遊学のヤーコン畑で試用してもらうことになった。

これまで、茅葺きのみだったススキの用途が拡大する。「文化財の森」から「野菜や果物の森」にもなれるかも。すでに、野焼き後のワラビ採りや安全で美味しい水を汲みに来る人たちは沢山おられる。麗澤中学や川越小学校の児童たちの自然ふれあい学習に成人むけの自然散策や癒しの場にもなっている。そして、草原と森をセットにした生物多様性の保全。してみれば、我々のフィールドは多目的ダム、天然のクーリングタワーみたいなものでは！？



青木沢の鯉のぼり

野焼きと除伐の次は生き物調べと古道の再生・活用（＝フットパス化）。そして、9月の「草原セミナー」と10月の茅刈り講習会&コンテストの準備だ。労働集約的な茅刈りを一握りの地元古老の皆さんだけにご負担をかけてはいけぬ。もっと地元や市民ボランティアの参画、動員をはからなければ続かないし大きな成果は期待できない。

その意味で、ここ1,2年の比較的若い会員諸兄の増加や高校生、大学生の皆さんのプログラム参加は真に嬉しい限り。しかし、問題はそれを拡大生産し持続していく力だ。我々自身が智恵も出し汗もかいて、魅力あるプログラムを用意し地元はもとより町役場、県民局、県庁から流域の有力市民団体にいたるまで粘り強く働きかけを重ねることにつきよう。

会の活動のモットー - 「楽しみながら汗をかこう」を思い出しながら思考するうちに週末は雨ばかりだった5月も終わってしまった。

野焼きして神迎へけり山の里 (青)